



Title	牛山鶴堂と『西洋落語』
Author(s)	浦, 和男
Citation	國文學, 101: 303-318
Issue Date	2017-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/11143
Rights	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

牛山鶴堂と『西洋落語』

浦 和 男

はじめに^①

明治十九年十月十三日の朝日新聞一面に次の様な記事が掲載された。

「●関西法律学校の設立 当府下に於て孰れの地に設置するや未だ其場所は定まらざれど吉田一士（東京明治法律学校旧監事法律学士）鶴見守義小倉久の三氏が創立者となり野村祐亮氏之れが幹事となり当控訴院及び始審裁判所に在勤せらる、ポアソナード氏の門人なる検事堀田正忠法律学士なる評定官井上操同検事小倉久同判事鶴見守義同志方鍛同検事手塚太郎の諸氏が講師となり汎く内外の法律及経済学を教授する一大専修学校を開き追々関西の各地にも支校

を置き法学を修めんとする者の便を開かる、の計画ありて先其仮事務所を土佐堀第十七国立銀行支店内に置かれたり」^②

本学開学わずか三週間前になつても、教場が決まらずにいたのである。しかし、二十二日の同紙四面下段右すみに生徒募集の公告が出る。

「法学生徒募集 今般関西ノ便ヲ計リ左ノ講師ヲ招聘シ不日官許ヲ得テ博ク内外ノ法律及ビ経済学ヲ講授ス有志ノ諸彦ハ来ル廿八日迄事務所へ申込アル可シ」

講師は、堀田正忠、小倉久、井上操、手塚太郎、鶴見守義、

志方鍛、名誉校員は児島惟謙、大島貞敏、土居通夫、事務員として、校長小倉久、学監鶴見守義、校主吉田一士、幹事野村祐亮、会計取扱は第十七国立銀行支店となっている。「関西法律学校事務所」は、「大坂京町堀上通三丁目三十六番地願宗寺内」。生徒募集の左隣には、神戸居留地のデラカンブなる人物の「失大広告」が載っている。

そして、十一月四日、本学前身の関西法律学校が開校した。

教場定まらぬ新聞報道の一週間前十月六日、ある本の版權免許が下りる。日付はわからぬが、関西法律学校開校の翌月十二月、翻訳書『政治小説 梅蓄餘薫』前編が東京春陽堂から出版された。ウォルター・スコット「アイバンホー」の意識である⁽³⁾。意識者は時に若十七歳の鶴堂牛山良助、長野県平民。素山跡部正道校補。神田区五軒町二十番地に住むこの青年は、この書の巻末に「広告」を掲載、神田区末広町十二番地への転居を知らせた。翌年三月には再版が出ている。発行部数不明、しかし評判の書であったはずだ。

十二月十一日、朝日新聞二面下段に「関西法律学校」と題する記事がある。

「同校は此度愈朝野紳士の賛成を得て廣く授業に着手するの

運になりたるに付隨て従来の教室狹隘を告ぐるに至りたるに因り明後十三日東区淡路町三丁目二十一番地へ移転し同日より開講する由其学科及講師は経済学の野村鈇吉氏、人事編小倉久氏、治罪法堀田正忠氏、刑法井上操氏、法律大意味塚太郎氏、財産編鶴見守義なりと云ふ⁽⁵⁾」

『政治小説 梅蓄餘薫』を手にした校友はいたであろうか。

牛山良助、または良介、号を鶴堂、十九年から二十年にかけて、種々の翻訳書を手がけている。その一冊は、二十年五月発行、東京の成文堂出版、『英和対訳 西洋落語 A Comical Book』と題する⁽⁶⁾。英語笑話（ジョーク）の対訳書であり、英語笑話を使用した英語学習書の嚆矢である。前月四月には、最初の笑学研究論書、土子金四郎『洒落哲学』が哲学書院から出版された。「笑い」、「滑稽」を近代哲学の俎上に上げようとすると同時に、英語笑話を原文で紹介する試みがなされていた。明治前半最大の対訳笑話集、福沢諭吉校閲になる息子一太郎の訳書『開口笑話』は、この五年後、二十五年九月に交詢社から出版される⁽⁷⁾。

牛山鶴堂の略歴

牛山鶴堂については長らく人物がよくわからなかったが、実は昭和十一年に今井卓爾が「鶴堂牛山良介について」で鶴堂の人物を明らかにしていた。斉藤昌三主宰「書物展望」(書物展望社)の昭和十一年五月号、六月号に連載され、昭和十五年五月発刊の『書祭(人)』(書物展望第百号記念文献資料集)に再録されている。⁸⁾『書物展望』誌も『書齋(人)』も、現在国会図書館のデジタル資料送信サービスで閲覧できるようになった。

鶴堂は「良介」と「良助」を使い分けているようだが、その理由はわからない。今井の論考に翻刻された証書類は「良介」と記載されている。戸籍上は「良介」であろう。

今井の論考を元に略年譜を記す。年譜中*印は、氏の言及なき項目である。

明治二年 長野県下諏訪町生まれか。父は長野県諏訪郡四賀村普門寺の宮大工牛山傳治。諏訪神社下社直属宮大工の三井峯吉の元で仕事。良介の本籍地は四賀村という。母は下諏訪町小松貴一の姉。

十五年 自宅近くの温故義塾入塾。西師意(にしもると)に師事、英語などを学んだらしい。

十六年 この頃東京へ。学校に通わず独学で苦学したらしい。今井によれば、同郷の「小澤琢郎」と同居し、就職口を探していたという。

十九年十二月 『政治小説 梅黄余薫』(春陽堂)出版。ウォルター・スコットの「アイバンホー」の意識である。表紙は「牛山鶴堂纂訳」、序文では「鶴堂牛山良助」、一頁には「牛山良助意識、跡部素山校閲」とある。奥付では「神田区五軒町二十番地となっているが、巻末に「神田区末広町十二番地」への転居「広告」がある。今井によれば、この稿料を当時怪我をしていた父の医薬代としたという。この書は二十年三月に再版発行。

二十年二月 同書の後編出版。

同年三月 『双鸞春話』(春陽堂)出版。ピーコンスフィールドの「ヘンリテッタ・テンプル」の意識。「鶴堂牛山良介意識、跡部素山校閲」とある。

同年三月 『魯敏孫漂流記』(春陽堂)出版。デフォアの「ロビンソン・クルーソー」の翻訳。「鶴堂牛山良助訳編、跡部素山校補」とある。

同年五月 『社会小説 日本之未来(上)』(春陽堂)出版。「鶴堂牛山良介著述、蟠松藤澤平司校閲」とある。¹⁰⁾

同年五月 『日本新世界』(前編) (成文堂) 出版。「鶴堂牛山良助著述、蟠松藤澤平司校閲」とある。後編は未刊行か。

同年五月 『英和对訳 西洋落語 A Comical Book』(佐藤乙三郎) 出版。奥付に「牛山良介編纂訳述」とあり、中表紙には「revised by H. Huzisawa」と記されている。藤澤平司である。

同年六月 『改正パーレー氏万国史直訳(上)』(成文堂) 出版。「牛山良介直訳、実学会英学校校閲」とある。¹¹⁾

同年七月 『改正増補 松本氏会話』(成文堂) 出版。奥付には「著述人 牛山良助」とある。二十一年の『太平倶楽府』巻末広告によれば、「牛山良助先生編纂、松本孝輔先生校正」とある。¹²⁾

同年十月 『改正パーレー氏万国史直訳(下)』(成文堂) 出版。同年十一月 『社会小説 日本之未来(下)』 出版。後に上下合本が出版されたという。この頃郷里に戻り、英語を教えているともいう。

二十一年八月 『クワツケンボス氏小文典独案内』(富山堂) 出版。「梅木正衛直訳、牛山良助校閲」とある。¹³⁾

同年十月 埼玉県第一部庶務課雇員。月給十円。今井は十月十五日付辞令を翻刻している。

二十二年四月 二十三日付で退職。同じく辞令を翻刻している。

同年十一月* 「英国々会議院史」(牛山良助重訳)、「歐米諸強國形勢一班」(鶴堂居士纂訳)、『自治新誌』二(二二三) (自治新誌社、東京)。「歐米諸強國形勢一班」(鶴堂居士)、「晩秋所感」(西詩意訳) (鶴堂居士)、「同二(二四)」。この『自治新誌』は、自治党機関誌として発行されるという噂のなか二十二年二月に三省堂雑誌部から創刊、七月発行の十六号から『自治新誌社』が編集・発行した。自治党と鶴堂の関係は不詳。

同年十二月* 「英国々会議院史」、同二(二二五)。

二十三年二月。「英国国会議院史」、「歐米諸強國形勢一班」(鶴堂居士)、「同二(二二九)」、「歐米諸強國形勢一班」(鶴堂居士)、「同二(三〇)」

同年三月* 『西洋落噺』(大阪、明昇堂) 出版。『西洋落語』と同一内容で、書名中「落語」が「落噺」となる。良介の同意で出版されたかは不明。

同年四月* 「英国々会議院史」、「自治新誌」三(三三四)。

同年五月* 「歐米諸強國形勢一班」(鶴堂居士)、『自治新誌』三(三三五)、「歐米諸強國形勢一班」(鶴堂居士)、『自治新誌』三(三三六)。翌六月に出た第三七号で廃刊。

二十四年十一月* 牛山良助名で『野州那須郡高林村大字青木

ノ営業ニ関スル訓旨大綱』を出版。十七頁ほどのパンフレットで私家版と思われる。奥付住所は「朝野新聞寄留」となっている。埼玉県雇員退職後「自治新誌社」に勤務し、廢刊による会社解散後に朝野新聞記者の職に就いたようだ。

二十五年二月・十四、十五、十七日に「朝野新聞」に「武士（もののふ）」を「鶴堂生」で掲載¹⁴。これは短篇小説である。

同年七月頃 独逸伯林本会日本東京支会 国際法特別講修科入学。この組織は不詳。この頃には朝野新聞を退職していたと思われる。

二十六年六月二十日 同終了。今井は「修業通知書」を翻刻し、成績を記載している。

二十七年 日清戦争に従軍したが、どのような形での従軍かは不明。今井は新聞記者と推測している。

二十九年 十七歳のよしゑと結婚。伊奈出身。この頃中外商業新報社員。

三十年六月六日・関東各地の新繭市況視察に良介を特派したとの記事が中外商業新報にある。¹⁵「大正日々新聞」大正九年六月四日に「糸価標準千八百円維持が問題となつて議論沸騰」なる記事がある。¹⁶記事中に蚕糸業同業組合の特別委員に「小澤琢郎（長野県）」の名が見られる。この人物が鶴堂と同居して

いた「小澤琢郎」と同一人物であれば、蚕糸業界につながりある記者として特派されたのであろう。

三十二年 長男鐵雄誕生も一歳を迎えず七月七日に他界。

三十四年二月・『西洋落断』が東京と大阪に店を出す青木高山堂から出版。奥付によると印刷は大坂。また「再版」とある。

これも鶴堂の同意を得た出版であるかは不明。鶴堂の住所は「日本橋区通一丁目十七番地」。

三十五年 長女ちよ誕生。成人後他家に嫁ぐ。この頃、深川に「海濱病院」を建設する計画を立てる。

三十九年 次女ふみ誕生。今井の調査時には養子を迎え、母よしゑと諏訪町に在住。養子は大工業という。

同年三月三日 腎臓病で日本橋区亀島町一丁目六十四番地の自宅で逝去。享年三十八歳。墓は谷中の功德林寺にあるというが、現存しているかは不明。戒名は「眞如院圓譽實相觀月居士」。「牛山良介之墓」とあり、この墓は後に中外商業新報社長ら同僚たちによつて建立された。傍らには息子鐵雄と叔父小松貴一の墓が一つになっているともいうが、これも現存しているかは不明。

さらに『スピンソン氏万国史直訳』という著作もあることが、巻末広告からわかっている。実際に出版されたかどうかは不明

であり、今井もこの書を記載するも出版年を書いていない。また、草稿として「内臓組織解剖図原稿」、「稲妻銀行」が残っているという。前者は西洋医書の筆写と切り抜きで、十三葉五十二図を含む。後者は四十五回分の小説で挿絵もあるが、上梓されたかは不明という。今井は「尾崎紅葉や幸田露伴合著のものあると言はれるが具体的にははつきりしない」とも述べている。さらに、メキシコ公使館と関係していた、中央線開通式に社長野崎廣太とともに招待を受けたが出席できなかった、などの話も伝えている。資料は柳田泉、吉江喬松（ともに当時早稲田大学教授）、今井真樹（当時の長野県職員か）の提供によるようだが、その資料が現存するかどうかも、まったくわからない。

年譜中、二十年十月出版の『改正パーレー氏万国史直訳（上）』は「実学会英学校校閲」とある。東京朝日新聞の二十年一月五日朝刊に同校の広告がある。「新年は実学会設立の一箇年なれば」という一節があり、十九年一月頃に創立したことがわかる。十九年三月二日の讀賣新聞朝刊二面に「実学会の分校神田仲猿楽町四番地の実学会英学校にては今度桜田久保町の英語学教授所を本校に附属せしめ実学会芝分校と改称して正則英語学を教授するといふ」という記事があり、同紙四面に学校の広告もあり、着実に大きくなっていくことがわかる。二十年十

一月には大阪朝日新聞にも生徒募集広告が出ている。校長は赤峰瀬一郎。新聞広告、巻末広告からは、ソムメルス、篠野乙次郎（英語科主任）という教員がおり、二十年からは文学士天野為之が教員となったことが判明している。赤峰校長が十九年十月に出版した『米国今不審議』巻末広告には、「実学会英学校ハ主トシテ英書ニ基キ実用ニ急ナル學術ヲ教授シ他日第一高等学校其他ノ官立学校ニ入ラント欲スル者ノ階梯トス」として、幼年科、予科、本科、高等科からなるなど説明があり、授業科目も掲載されている。パーレー（広告では「パーレイ」）の『万国史』は予科第一級、第二級で、スキントンの『万国史』は本科第一級、第二級で訳読の教科書となっている。

この赤峰は二十五年六月には『日英韓三国対話』という、日本語、英語、朝鮮語の会話帳を上梓した。奥付を見ると、赤峰の住所は「大阪府東成郡天王寺村千四百八番屋敷寄留」となっている。その後二十七年の東京朝日新聞朝刊六面に赤峰の帰朝報告記事があり、「通訳官として第一軍に從ひ渡韓」していたが、「支那国九連城」から戻った、特定の人に英語と朝鮮語を指導するといった内容で、「神田三崎町一丁目十一 英学館内」を寄留先としている。二十年頃は英学私塾の乱立の時代であった。とくに二十一年二月に始まる国民英学会は早くから実力派の英

学校として人気を集め、夏目漱石も通った成立学舎も有名であった。

鶴堂と実学校の関係は全くわからない。学生であったのか、教師であったのか。学生として入学し、実力を認められ教員となったが廃校となり、それが埼玉県職員への転職とつながっている可能性もある。

赤峰瀬一郎は熊本洋学校二期生で同志社英学校に転学、いわゆる「熊本バンド」の徳富蘆花ら「奉教趣意書」に署名していない一員である。九年頃に同志社に入り、十二年頃に卒業、『米国今不審議』によれば十四年から五年間カリフォルニア州サンフランシスコのカリフォルニア州立大学で学んだ。帰国直後に実学会と関わり、英学校校長となったと考えられるが、英語の実力は確かであった。篠野乙次郎はのちに第一高等中学校英語教授となり、明治の大英語学者齋藤秀三郎との共著もあるほどの実力ある人物である。十九年十二月には『内地雑居交際の心得』（東京、金玉堂）という外国人との交際指南書を上梓している。天野為之のちに二代早稲田大学学長を務め、明治期を代表する経済学者である。二十三年には第一回衆議院議員総選挙に故郷佐賀県より立候補、当選した。

鶴堂は、こうした人々との交際の中で英語力を養い、政治へ

の目を向けたことはまちがいない。鶴堂は語学習得のみならず欧米人との交際にはジョークが不可欠であることを知っていた。笹野の『内地雑居交際の心得』一二二頁に、「滑稽戯談は常に宴上には必要なりと雖とも意匠の陋猥ならず且つ其席に適すべきや否やに注意あるべし滑稽も天性得意なる人の巧に演ずる時はずいぶん座興を助け面白きものなれとも其不得意にして拙なる者は屢失策する事あれば寧ろ試みざるが宜しかるべし故に吐かせゾヨンソン氏曰く滑稽を云はんとして却て過つ者を見るに恰も溝を飛ばんと欲して過つて陥る者を見るが如しと是れ細密こまかに其實況を穿てるの言と云ふべし」とある。鶴堂はこの一言を直に聞き、これが『西洋落語』の編纂にも繋がってきたのであろう。二十歳以後の鶴堂の道は、実学会英学校で決まった可能性が極めて高い。

『西洋落語』を読む

『英和対訳 西洋落語 (A Conical Book)』は、現段階では日本で最初の対訳笑話集である。後に「落噺」と解題された点からすると、「せいようおとしばなし」と読むのが正しいであろう。東京の佐藤乙三郎が出版した。乙三郎は成文堂の社主であ

る。奥付には書肆名はないが、表紙にSEIBUNDOと記載されている。国会図書館書誌情報では縦約十九センチ。表紙の絵柄については、公開されているデジタル版を参照されたい。定価三十銭。「版權免許」は二十年三月四日。「刻成出版」は国会版では月日に張り紙がされて「六月六日」と見えるが、上田市立図書館花月文庫本、神戸大学付属図書館住田文庫本ともに「同年五月」となっている。二十三年三月四日〔御届〕は二十年三月四日)に『西洋落噺』と解題して、大阪の濱本伊三郎が「明昇堂版(大阪北久宝寺町)」を「版權所有」で出版した。定価三十銭。表紙絵が異なり、序文がない。

三十四年二月二十一日(印刷は二月十五日)に『西洋落噺』として青木嵩山堂(東京、大阪)からも出版される。印刷は大阪にある同社印刷部。奥付では「再版一」となっている。表紙絵がさらに異なる。赤紙中表紙はあるが、序文がない¹⁸⁾。正誤表がなくなり、挿絵の頁となっている。定価二十五銭。オリジナル版を含め、すべて国文学資料館でカラーデジタル公開している。(初版は国会図書館デジタルコレクションでもモノクロで公開)。

全体は序文二頁、本文八十一頁に附録十頁である。中表紙は赤紙で、鶴堂の名の下に“TRANSLATOR ‘IVANHOE’” “HENRIETTA TEMPLE” AND “ROBINSON CRUSOE”

ETC.とある。一―二頁が漢文による序文、「梧堂素夫誌、永華散史書」と記されている。「梧堂素夫誌」は『日本新世界』の序文にも名があるが、どちらも不詳。鶴堂が『改正パーレー氏万国史直訳(上)』で「鶴林散史」と記しているところを見ると、「梧堂素夫」は跡部素山かもしれない。続いて、頁左半分に英文横組、右半分に訳文縦組で、「第一席」から「第八十席」まで対訳笑話となる。落語だけに「第一話」ではなく「第一席」とするところは、洒落つ気が大きい。笑話は八十一頁で「大尾」となり、続く頁で「正誤」十カ所を指示する。APPENDIX(附録)では、俚諺、名言類が五十ある。頁左半分が英文横組、右半分は訳文が左から右へ縦組となる。英和の行数を合わせ、和訳が英文行数を超えなくするためであろう。

本文には語註釈はまったくない。前半一部の笑話に一部出典が記される。出典は英米の雑誌、新聞であるが、日本の「団々珍聞」の名もある。出典紙誌は、

Texas Sifings, Burlington Free Press, Philadelphia Herald, New York Sun, Philadelphia Call, Boston Transcript, Chicago Tribune, Kentucky State Journal, Lowell Courier, French Paper, Tiddis, Lowell Citizen,

Marumaruclubun (団々珍聞), Life, Chicago Sun,
Newheaven News, London Punch

一頁には、「R. S. USHIYAMA」と書かれてゐる。「R. S.」は「Ryosuke」のもりであろうか。洗礼を受けて、ミドルネームを持つていたのであろうか。訳文はカタカナ書きにはほゞ総ルビ。英文の誤植がひどい。二十三年本、三十四年本とも同じ活版を使用しているようで、誤植も同じである。

この時期に、なぜ鶴堂はこの対訳笑話集を編纂したのでろうか。「対訳」という発想も、「西洋笑話」という発想も決して独自のものではない。すでに「団々珍聞」で英語の対訳笑話が連載されていた。毎日新聞では二十年二月初旬まで英和対訳名言三本、時事新報も二十年四月頃まで名言二本、笑話一本の英和対訳を掲載している。⁽¹⁹⁾実学会英学校の授業あるいは編纂雑誌(ないしは新聞)で対訳笑話の紹介があつたかもしれない。残念だが、実学会英学校の存在そのものが十分にわからないので、ここでは結論を下せない。

漢文による序文からは、この『西洋落語』の目的はわからない。二十一年二月出版の『太平倶楽部明治笑談』(成文堂)巻末の再版広告には、「欧州文明国ノ俗間ニ行ハル、滑稽洒落ヲ集メ

且英和対訳ニセシモノナレバ一ハ外国ノ事情ノ一斑ヲ知り一ハ英学ヲ修ムル者ノ為ニ快楽中ニ利益ヲ享クル古今無類ナ珍本ナリ」とある。この「快楽中に」英語力を身に付けるという発想は『改正パーレー氏万国史直訳(上)』の序文にも書いている。「愉快」な気持ちになれば学習も進むので、そのためにこの「直訳」を出版したという。苦学をして英語を身に付けた鶴堂の「老婆心」(『改正パーレー氏万国史直訳(上)』序文)である。この「老婆心」のひとつの結実が『西洋落語』であつただろうが、鶴堂が笑い関連に関わるのは、この一冊だけである。

巻頭第一席を見て見よう。

No. 1

A Texas clergyman endeavored to console the last hours of a dying man. "What is it that you regret most to take leave of?" he asked. "My life, parson." (Texas Sayings)

第一席⁽²⁰⁾

或ル寺ノ和尚ガ最早瀕死ト致シマシタ病人ノ枕元ニ至リ種々
慰ムル序ニ病人ニ問ヒマスルニハ 和尚「イヤ貴殿ニハ此世
ノ名残ニ特別惜シイモノハ何ンデシヤウ子ト云ヘバ病人「左
様サ生命デス

実にこなれた日本語訳である。八十話すべて、このような原文一致の訳で、笑いそのものも猥雑なもの、強い風刺的なものはない。

No. VIII⁽¹²⁾

Mitilda's lover to her little sister at dinner- "Come, Myrtle, give me a kiss just one." Little Sister- "No, I won't; you asked Siddy for just one in the parlor, and you took two." (*Chicago Tribune*)

第八席

オ松ノ情郎ナル竹太郎ガ食事頃デアリマシタガオ松ノ妹ニ向
ビシマテ 竹「オイ梅ちゃん一寸ト茲へオ出デナ而シテ僕ニ
一度接吻ヲオ許ナタツタ一度限リダカラサ 梅「妾急タワ何故
ツテ先刻貴君サンオ座敷デ姉サンニ只ツタ一度サセロト被仰
ツテ二度シタジヤア、リマセンカ

マチルダ故にお松、登場せぬ会話主はお松から竹太郎となり、お松の妹はお梅とする。「情郎」に「イイヒト」、「接吻」に「おさしみ」とルビが振られているように、当時の隠語が時々顔を出す。梅垣実編『隠語辞典』(東京堂、昭和三十一年)には「お刺身」「刺身」の項目があり、「刺身」に「色・形からの連想」

と説明が補足されている。

No. LXVI

"Doctor, you look quite pale."
"I am ill."
"Who is attending you?"
"Myself."
"Then it's a case of suicide."

第六十六席⁽¹²⁾

男「医博士貴殿ハ大層御顔ノ色ガ悪ウ御座イマス子ー 博士
「ハイ、、コノ頃ハ如何モ不快デ御座ルデ 男「誰カニ診テオ
貰ヒナサイマシタカ 博士「イヤ誰ニモ診セハ至シマセン 自分
デ察シテ居リマスヨ 男「先生其レシヤア自殺事件デマス子ー
現代でも十分通じる笑話であり、江戸小咄にもありそうだ。
「子ー」の長音、「ハイ、、」が会話を生き生きとさせる。次の
話は訳文に補足を加えることで、オチをわかりやすくしている。

No. XXIV⁽¹²⁾

A man said to his aged mother speaking of his wife. "I do with I could keep Mary from exaggerating so." "get her to

talk about her age," responded the shrewd old lady.

(Chicago Tribune)

第廿四席

或ル男ガ女房ノ事ヲ老母ニ話シマスル時ニ 男「ドウモオ妻ハ悪ルイ癖ガアツテ兎角物言ヲ大キウ言フテイケマセンマアアンナニ枝葉ヲ付ケンデモ宜サソウナモンデスガイヤハヤ美ニ困ツタ代物デト言ヒマシタレバ老母ハ流石ガ老母ダケ頓知能ク即答イタシマスルニワ 老母「御前マアオ妻ニ自分ノ年記ノ話シラサセテ御覽屹度枝葉ヲツケルモンジアナイヨ直訳すれば、「ある男が妻のことを老母に話して、ぜひともメアリーがことを大げさに言わないようにしたいもんです、と言えば、賢い老母、それなら年齢の話をさせてもらん。」で片付く話である。訳そのものに「枝葉をつけて」説明をしながら、笑話としてのおもしろさを保っている。福沢諭吉の息子一太郎の訳を見ておきたらう。

WHY HE DID IT.

A. You have heard, I suppose, that I am married again?

B. Yes, and they say you married your deceased wife's

sister.

A. Yes, I did.

B. Why did you do so strange a thing?

A. Simply to avoid having two mothers-in-law. (From

French)

何故に之を為せしや

甲 あなたは多分お聞き及びで御在ませうが私は再び妻を迎へました

乙 左様で御在ますソウシテ承ればあなたは先輿様のお妹子をおもらいなすつたさうで御在ます子

甲 左様で御在ます

乙 何故左様な変たことを成されたので御在ます

甲 何にも訳はありません唯外姑を二人持たない為めで御在ます

“Papa,” said Charlie, “will you buy me a drum?”

“Ah, but my boy, you will disturb me very much if I do.”

“Oh no, papa! I won't drum only when you are asleep.”

(Pittsburgh Chronicle)

長吉 おトシさんわたしに太鼓を買っておくれな

父 それでもお前太鼓を買たらおトシさんを困まらせるだらう

長吉 いゝへ、おとっさんの眠て居る時より外は撃きはしな
いよ

一太郎の訳も話し言葉に近いが、平民の鶴堂と士族の一太郎の
違いであろうか。鶴堂の方がはるかに庶民的である。

もう一人、国木田独歩の訳を見てください。本名の国木田哲夫で
編集した『米国一口噺』も英和对訳笑話集である。⁽²⁵⁾三十九年十
一月に独歩社から出版された

(6) Little Charlie: "Papa, will you buy me a drum?" Fond
father: "Ah" but, my boy, you will disturb me very much
if I do." Charlie: "Oh, no, papa. I won't drum except when
you're asleep.

小さきチャラー「お父さん、私に太鼓を買って呉れませんか」
好いお父さん「うむ、買ってやるのは可いが、己を困らせる
だう」チャラー「何あに、お父さんが寝てらる時しか鳴ら
るなから」⁽²⁶⁾

(23) "I say Bobby," said Featherly, "did you hear your sister
say if she enjoyed exhibition we gave her last night?" "She
was pleased with your part of it, Mr. Featherly. She told

me that you made a perfect exhibition of yourself."

「おいボツビー君」とフェザリーは「君の姉さんは昨晚僕等が
開いた展覧会が面白かつたと云つて居はしなかつたかキ」「フェ
ザリーさん、姉さんは貴方の受持の処を面白がつて居ました、
姉さんは貴方が身体に申分のない展覧会をして居たと云つてい
ました」

独歩の訳は直訳調で、鶴堂の会話の生き生きとした感じが無い。

(63) では、「姉さんは貴方が身体に申分のない展覧会をして居
た」という、意味のわからない訳をしている。独歩は make an
exhibition「馬鹿なことをして人の笑いものになる、恥をさらす」
を直訳している。“she enjoyed exhibition”を受けての“made a
perfect exhibition”であり、独歩は意図的にこのような訳にし
たのか、誤訳なのかはわからないが、これでは笑話のおもしろ
さが消滅してしまう。わずかの例での比較であるが、鶴堂の訳
が生き生きしていることがよくわかる。そして、鶴堂の英語力
と日本語力の素晴らしさもよくわかる。

鶴堂の原文一致訳はこの本だけである。例えば、二十年三月
の『魯敏孫漂流記』の第二回の冒頭部分、

怒濤を凌ぎ漸やくに九死を出で、一生を求めし危難の乗組

等は天運強く端なくも岸辺に上るを得てしより防波の疲れ心ろの緩み二ツ一度に発しけん上陸と齊しく砂地に倒れ生体なきを浦役人或は土地の誰彼が薬を与へ介抱なし衣食は固より数多き金を与え慰さめられしに：

と訳されている。「怒濤を凌ぎ漸くに／九死に出で、一生を／求めし危難の乗組等は／天運強く端なくも…」と調子を付けて音読すれば、むしろ講談調の訳文となる。素山、平司がどのような校補をしたかは不明だが、鶴堂はもちろん素山も平司も、当時の明治人と同様に落語、講談を愛好したことであろう。

鶴堂が関係したと考えられる実学会英学校の校長赤峰誠一郎の『米国政教之内幕』（二十年二月、実学会英学校）は、言文一致体で書かれている。その「緒言」の後半で次のように述べている。

我が文章を文と成り法と成るべき短文や小句を作り出しつゝ、末葉もしき帝国の日本文典をそるそると作る学士の手引と成り既に死したる大和語や六ヶ敷過ぎる漢語を去り一般通用の俗語のみを拾ひ集めて書きましたが未来に於ても相変わらず此改進主義を採りましょう

十九年十月に出版した『米国今不審議』（実学会英学校）では、まだ文語体を使用していたが、わずか数ヶ月で言文一致体を使用している。その理由もまた不明である。赤峰の態度が鶴堂の翻訳にも大きく影響している可能性は高い。

文学研究の早い時期から、この『西洋笑話』は蚊帳の外であった。明治期の西洋的笑い、ユーモアの受容という問題に限定せず、鶴堂の言文一致体の翻訳の態度、また「熊本バンド」の一員との関連を考えるならば、この『西洋笑話』は文学史の中で一度再討する必要がある。

結語

鶴堂、一太郎の対訳笑話集に続くのは、三十四年八月の勝俣銓吉郎『英和对訳笑話集』（東京、ABC出版社）である。日清戦争後の国威発揚とともに中等高等教育の制度が整い、英語学習がブームとなる三十年前後から、英語学習雑誌には笑話だけではなく、などなど言葉遊びも取り入れられるようになる。何らかの形で「笑い」の要素を取り入れた英語学習書は三十年以降三十二冊、そのうち笑話だけの対訳書は十三冊を確認している。奇しくも、鶴堂の再版本ができる三十四年から笑話

集がほぼ毎年一冊のペースで刊行されているが、どれだけの部数が出回ったかは定かではない。実際、鶴堂の再版本の与えた影響もはつきりしない。若干十八歳ほどの青年の書が、明治期の、笑ひ、英語教育、文学に、はたしてどれだけの影響を与えたのか。出版百三十年を迎える今年、この興味深い書は、さらに何かを語るにちがいない。

〔注〕

- (1) 本稿は、水門の会神戸例会研究発表「牛山良介と笑話集——『西洋落語』読解再稿」(二〇一六年九月三日、於甲南女子大学)に基づき起稿した。口頭発表の場を設けていただき、当日質問をしていたいただいた諸先生、論文発表の場を与えていただいた関屋俊彦教授、山本卓教授に記して感謝する。
- (2) 後日吉田一士の肩書を「明治義塾法律学校」に訂正する記事が載る。同紙面に「博物場内に催す狂言」の記事がある。「来る十六日同場に於て硝子他九品の共進会開場式の挙あるに付き同日野村又三郎氏の狂言の催しあり其番組は菊の花、鳴子の遣子、鼻取角力、仕舞、蜘蛛盗人、弓矢太郎等なり」。
- (3) この作品の評価は本稿の目的ではないので論述を省く。先行研究を参照されたい。原本は国会図書館、国文学資料館

でデジタル公開されている。

- (4) 素山跡部正道については(9)を参照。
- (5) これらの記事は本学「年史紀要」第一号(一九七五年)に掲載されているが、ルビが省略されている。記事中、野村銓吉に「のむらしんきち」とルビが振ってあるが、誤植であるか。余談であるが、手塚太郎が旧東京外国語学校仏語科を卒業した直後に長谷川辰之助(二葉亭四迷)が露語科に入学する。露語科の村井弦斎と手塚は同時期に在学していた。
- (6) 国会図書館の原本初版はマイクロフィッシュから起こしたモノクロのデジタル映像である。国文学資料館版はすべてカラーである。
- (7) 国文学資料館でデジタル公開されている。この時期の笑い学研究については、拙稿「明治前期における笑い論の受容と展開」(『文教大学文学部紀要』二五―一、二〇一一年)参照。
- (8) 一一六―一三三頁。これらの書誌は本学総合図書館にも所蔵されている。
- (9) 跡部は本名正道。人物不詳。静岡県土族。二十四年七月十九日の東京朝日新聞に、「東京活版職工組合」の記事に対する「跡部正道」投稿の「弁駁書」を掲載している。国会図書館で素山『新著 史伝軍歌 第壹輯』(二十五年十二月、大阪、

日進堂)がデジタル公開されている。奥付の住所は平野の日進堂に寄留となっている。巻末に第二輯の予告があるが、未完のようだ。これから察するに、素山は詩歌の知識ある印刷所の関係者と考えられる。「校閲」は英文と対照して訳文を直したのではなく、意訳の日本語を「校閲」したということか。

(10) 蟠松藤澤平司も人物不詳。

(11) 本学総合図書館矢口文庫に原本がある。この本では六月出版となっている。国会図書館版は上下とも十月出版。下には十二月出版本もあるようだ。

(12) 「松本氏」は「松本孝輔」。「松本氏会話」は六年に出版された『英和通語』である。四年出版「生産会社編、松本孝輔蔵板」の『英和通語』和綴本全四巻が、六年に和綴一巻本の『英和通語』(FIRST EDITION)になり、同年内に洋装本のSECOND EDITIONが出版される。前者は早稲田大学古典籍総合データベースで、後者は国会図書館デジタルコレクションで公開。国会図書館版はマイクロフィルムから起こしたモノクロ画像であり、表紙、奥付がない。この本は十九年頃に、大阪を中心にいろいろな書店から「翻刻」が出されている。十八年十月十一日の大阪朝日新聞には「松本孝輔先生訳『英和通語』」の広告が載るが、翌十九年五月十六日の讀賣新

聞の広告には「松本孝輔先生著 英語通語 通名松本乃会話」とある。各翻刻書の異同は本稿の目的ではないので省略する。この松本は、十八年三月二十四、二十五、二十六日に大阪朝日新聞に、所有している「横文活字」をめぐるトラブルについての注意喚起広告を載せている。ここでは「大阪府士族」となっている。また、その三年前十五年八月二十二日の大阪朝日新聞には、京都の煥文社が河原町三條上ルに活版所を置いて舎主であった「松本孝輔」が植松町に本舎を新築して八月一日から移転する旨の案内広告を出している。さらに、十九年六月十六日の讀賣新聞には「先に英和通語といふ会話書を出板せし松本氏」が「湯沸洋燈台(ゆわかしらんぶだい)」を發明して専売特許を得たという記事もある。松本は活版所の経営者であったことは判明したが、英語力については不詳。「松本孝輔蔵版」が、いつ頃から「松本孝輔著」となったのか、実際に著者なのか、その点にははっきりしないが、鶴堂の改訂増補の作業に松本が関わったことは事実であろう。後に『西洋落語』が大阪で再版される際に、松本が関わっていた可能性がある。

(13) 梅木正衛も人物不詳。

(14) 鵜飼新一『朝野新聞の研究』(みずす書房、一九八五年)

の情報により、記事を確認した。

- (15) 「渋沢社史データベース」 http://shashinshibusawa.or.jp/details_nenpyo.php?sid=15030&query=&class=&d=all
&page=16 二〇一六年九月四日確認。

- (16) 神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫 http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/ContentViewServlet?METAID=00219733&TYPE=HTML_FILE&POS=1&LANG=JA 二〇一六年九月六日確認。

- (17) 埼玉県職員、自治新誌社、朝野新聞社、中外商業新報社への就職は、天野が関係したのではないだろうか。今井、吉江、柳田といった早稲田大学教授が鶴堂の経歴を知る事ができたのも、天野が関わっている可能性は高い。

- (18) 国文学資料館本は赤紙中表紙表面をデジタル化していない。

- (19) 時事新報は二十年九月頃に掲載を再開している。硯友社「我楽多文庫」の二十一年から刊行される第三期の号には、対訳ではないが、「西洋軽口」の名で「花咲兵衛」の翻訳による西洋笑話の紹介が掲載される。『西洋落語』の影響は実証できないが、当時の文士たちが西洋笑話に関心を持ったことを示す。硯友社の社友に団々珍聞記者の礫川喜望や、『洒落哲学』

の土子金四郎も加わっていた点を見ると、硯友社には西洋的な笑い、ユーモア観がいち早く紹介されていた。

- (20) 以下、ルビがない語は本文にルビがない。会話主体を示す語にはルビが振られていない場合が多い。

- (21) Mitida は Matida の誤植。その他原文通りである。

- (22) 「座」「事」にはルビがなく。出典は記されていなく。

- (23) “with” は “wish” の誤植。“get” も本来は “Get” となす。

- (24) 誤植もそのまま翻刻した。

- (25) 拙稿「国木田独歩と笑い——『上等ボンチ』と『米国一口噺』、『笑いと創造 第六集』(勉誠出版 二〇一〇年) 参照。

- (26) 「寝てらる」は原文通りである。この笑話は、「少年倶楽部」昭和十年四月号の投稿にも見られる。

坊「お父様、太鼓を買ってください」

父「太鼓なんて喧しくって仕様がな」

- (27) 拙稿「明治後期における西洋笑話と英語学習」(『文教大
学紀要』二二―二、二〇〇九年) 参照。

(うら) かずお／本学准教授